

ができる。

* 本稿は、2001年12月5日に国際比較政治研究所において開催された研究会における筆者の報告の要約である。

引用文献

David Arter, *Scandinavian Politics Today*, Manchester U.P., 1999.

Demokrati Utredningen, *En uthållig demokrati*, SOU 2000:1.

David Held, *Models of Democracy*, 2nd ed., 1996.

Michele Micheletti, *Civil Society and State Relations in Sweden*, Avebury, 1995.

Bo Rothstein and Jonas Bergström, *Korporatismens fall och den svenska modellens kris*, SNS, 1999.

J. H. ゴールドソープ編『収斂の終焉』有信堂、1987年。

宮本太郎『福祉国家という戦略』法律文化社、1999年。

研究班報告 2 Global Studies Group

ロシアにおける史料の公開とレーニン文書

内田 健二

ここでは本来ならば、研究班としての活動を報告しなければならないが、残念ながら、我が班は報告するに足る研究活動を行っていない。それゆえ、個人として行ってきた研究の一端を報告し、班の報告に代えさせていただきたいと思う。

史料集の公刊ラッシュ

ソ連崩壊後、それまで嚴重に秘匿されてきたアルヒーフ（公文書館）史料が、なお重要な例外と制約があるものの一斉に公開されたことは、ソ連史と国際共産主義運動史の研究に大きな飛躍の可能性を与えた。とくに財政難に悩むロシアの研究所とアルヒーフが資金の獲得を目的として、欧米の出版社や研究機関と共同で精力的に各種史料集の刊行を進めた結果、我々外国人研究者は自国にいながらにしてそれらを閲読できるようになった。

そのうち、これまでで最大規模のプロジェクトは、イギリスのマイクロフィルム制作会社チャドウィック・ヒーリー社が販売権を得た『ソヴェト共産党・国家文書』である。これは全体で少なくとも2,500万ページ（リール数にすると25,000本）に達する壮大な計画である（価格も膨大である）。これを別とすれば、公刊された史料集の大半はテーマ別に編集され、価格も入手可能な水準に設定されている。現在、そうした史料集は出版ラッシュとすら呼びうる状況にある。

たとえば、最も早くから出版に取り組んできたイェール大学出版会の『共産主義の記録』（Annals of Communism、露語および英語）シリーズ、フーヴァー研究所やソロス基金などの援助による『二十世紀のロシア』（露語）シリーズ、ボストン大学とトロント大学が参加した『ソヴェト農村の悲劇』（露語）シリーズ、フランスからの資金に基づく『政治警察の眼から見たソヴェト農村』（露語）プロジェクトなど、枚挙に暇がない。これらはいずれも学術的価値がきわめて高く、今後、それぞれ専門的な研究のなかで利用されよう。ここでは、このあいだ新たに公表されたV・I・レーニンの著作について簡単に紹介することとした。

レーニンの未公文書と公表の動き

ソ連時代、革命の指導者レーニンの著作は、政権あるいは体制の正統性に関わるだけに、公表をめぐるには嚴重な統制が加えられていた。『レーニン全集』は第5版まで出版されたが、収録されている文書は版によって異なっていた。また後に述べるように、収録された場合でも、体制にとって都合の悪い箇所は注意深く削除されていた。

ゴルバチョフとエリツィンの両時代を通じて、他の研究者には与えられない特権を得て各種のアルヒーフに入館し調査した故D・ヴォルコゴノフによれば、『全集』や『レーニン

スキー・ズボールニク (レーニン関係文書集)』などに収録されていないレーニンの未公開文書は3,724点、レーニン署名の党・政府文書は約3,000点存在したという (『レーニンの秘密』(NHK出版、1995)上、7頁)。

未公開だったレーニンの著作は、ソ連末期、ゴルバチョフのもとで「歴史の見直し」がスターリン批判からレーニン批判へと遡るにつれ、断片的ながら公開され始めた。そのなかで最も大きな反響を呼んだ一つが、1922年3月19日付モロトフ宛書簡であった (*Izvestiia TsK KPSS*, 1990, No.4, pp.190-93)。1970年、これと同じ文書がパリで公表されたが、その時は内容があまりに非人道的なために信憑性が疑われた、いわくつきの手紙である。ここでレーニンは、教会財産の没収に向けて抑圧措置を最大限強化するよう指示した。

飢餓の地方では人々が人肉を喰い、数千とは言わないまでも数百の死体が道端にころがっている今だからこそ、最も猛烈で容赦ないエネルギーをもって教会財産の没収を行うことができる (したがって、そうしなければならぬ)。

彼は、名前を明示しないにせよマキャヴェリの統治術を引照しつつ、効果的な暴力の利用法を説いた。

ソ連崩壊後、こうしたレーニンの「暗黒面」を暴き出す動きが一層強まった。社会主義との決別を図るエリツィン政権にとって、共産党とりわけレーニンの信用を失墜させることは重要な政治的意味をもっていた。反レーニン・キャンペーンが繰り広げられ、その趣旨に合致する文書がアルヒーフから捜し出された。なかでも話題を呼んだ文書の一つが、1919年10月22日付トロツキー宛書簡であった。これはすでに『全集』に収録されている書簡であるが、『全集』では、苛酷な措置を例示し指示した一節が削除されていたことが暴露されたのである。以下に掲げる文の下線部がそれである (『全集』第5版44巻377頁を参照)。

我々はペトログラードの労働者をもう二万人ほど動員し、さらにこれに一万人位のブルジョア分子を加えて、彼らの背後に機関銃を据え、二、三百人を銃殺して、ユデーニチ [白

軍司令官] に大規模な反撃を加えるべきではないだろうか。

(*Komsomol'skaia pravda*, 12 February 1992.)

ソ連時代、歴史は政治に仕える侍女の地位に追いやられていた。この状況はエリツィン時代になっても変わらなかった。歴史認識と新史料の発見・公表は、その時々政権の思惑および人々の政治的雰囲気と無関係ではありえなかった (これについては、R・W・デイヴィス『ペレストロイカと歴史像の転換』(岩波書店、1990)と同『現代ロシアの歴史論争』(岩波書店、1998)を参照)。かつて忠実なスターリン主義者であったヴォルコゴノフが、ペレストロイカの最盛期にはレーニン主義者としてスターリンを非難し、さらにエリツィン時代には反共産主義の立場からレーニンを断罪するに至ったことは、歴史認識の変遷が単に新史料の発見のみに帰せられないことを象徴的に物語っていると言ってよい。

二つのレーニン文書集

この間、様々な新聞と雑誌で断片的に公表されてきたレーニンの著作を集成した文書集が、アメリカとロシアで出版された。一つは、『共産主義の記録』シリーズの一冊で、ロシア革命史研究の泰斗パイプスの編集による『知られざるレーニン』(R. Pipes, ed., *The Unknown Lenin: From the Secret Archive*, Yale U.P., 1996.) であり、もう一つはV・T・ローギノフ他編『V・I・レーニン：知られざる文書、1891-1922』(モスクワ、1999) (露語) である。前者はレーニンの手紙やメモなど113点を、後者は420点を収録している。

前者の収録文書のうち7点は、後者には収録されていない。それはローギノフ編が、レーニンのもとに寄せられた報告などの余白への彼の書き込み (たとえば「アルヒーフへ」などの決裁を指示した文言) を、独立した文書として収録していないことによる。ローギノフ編とパイプス編の両書によって、これまで秘匿されてきた最も重要なレーニン文書はほとんどが公表されたと考えてよい。

ただし、両書の間には、いくつかの文書の日付や位置づけに理解の違いがある。ローギノフ編には、パイプスが収録文書に付した解説への具体的な批判があるが、その批判はき

わめて妥当である。残念ながら、パイプス編は反レーニン・キャンペーンのバイアスの上に編集されており、時として史料批判の姿勢が十分でない。この点は、それが英語版であるため広く普及しているがゆえに、しかも編者パイプスが大きな学問的な権威を持っているがゆえに、とくに強調しておきたい。

たとえば、「秘密裡に、かつ直ちにテロルを準備すること」という指示を含んだレーニンのクレスチンスキー宛覚書き（日付なし）について、パイプスは赤色テロルを直接指示した文書であると位置づける。したがって、その日付けも布告直前の1918年9月初めであると推定する（Pipes, pp.55-6）。

しかしローギノフが批判するように、クレスチンスキーが財務人民委員（後に駐独大使）であったことなどを考えると、赤色テロルを治安関係者ではなく経済活動家に指示することは不自然であり、それはむしろ、1921年に取り込まれる経済管理機構の簡素化に関連すると考えるべきである（それゆえ、日付も1921年2月22日以前になる）。ここには、当時のポリシェヴィキ指導者による「テロル」という語の使い方（現代の我々がその語に込める意味との違い）に対する無理解も見られる。

もう一つの顕著な誤解は、レーニン＝ドイツ・スパイ説をめぐってである。パイプスは、1918年8月14日付ベルリン宛書簡の「出版に金を惜しむな。Berlinersがもっと金を送ってくれる」という文章中の「Berliners (Berlintsy)」をドイツ政府と解釈し、ドイツからの資金提供についてレーニン自身が言及した「唯一の明示的証拠」とであると主張する（Pipes, pp.50-3）。しかし「Berlintsy」とは当時の用法では、在独ロシア代表部を意味する語であった。こうした明らかな誤りは、1990年代半ば、レーニンがドイツの資金提供を受けたスパイであったとのキャンペーンが展開されるなかで生じたパイプスの思い込みの強さを物語る。

新たなレーニン文書の発見によって「裏づけられた事実」は、大きく以下の6分野にまたがる。第一は、帝政時代、警察のスパイであったR・マリノフスキーとの関係である。彼がスパイであることが明らかになった後でも、レーニンは彼に親身な手紙を送っていた。これは後のレーニンの言明と矛盾しており、

「革命家」レーニンのこれまでとは違う一面を覗かせるものである。

第二はイネッサ・アルマンドとの「親密な関係」である。彼女との交信は『全集』にも収録されているが、それらはいずれも「党の同志」としての関係を示す文書であった。レーニンを「革命の聖人」として神聖化したいソヴェト政権にとって、男女間の関係を示唆する文書は秘匿されねばならなかった。第三は、革命前の党財政とドイツ社会民主主義者との関係に関わる。シュミットの遺産問題をめぐって、レーニンはそれを管理するK・カウツキーやK・ツェトキンらに執拗な要求を繰り返し、関係は次第に悪化していったことが明らかになった。

いわば革命のエピソードとも言える以上の三点に対し、以下の三点はソヴェト政治史とレーニンのリーダーシップを考えるうえで重要である。第四は、外交および軍事における秘密指示である。レーニン文書によって多くの興味深い事実が明らかになったが、ここでは二つの例を挙げるに留める。一つは列強による干渉戦争に関わる。十月革命後間もない1918年春、英仏軍がムルマンスクに上陸した。後のソヴェト当局による公認の解釈では、これがソヴェト体制転覆を図る干渉戦争の始まりであった。しかし実は、この上陸は、懸念されるドイツ軍とフィンランド軍のムルマンスク侵攻への対抗策として、ロシア政府が承認したものであった。ロシア政府は英仏軍のムルマンスク上陸を認める一方で、公式にはその承認を否定するよう現地ソヴェトに指示したのである（1918年3月から4月にかけて、レーニンとスターリンがムルマンスク指導者A・ユリエフに与えた指示）。

もう一つの例は、戦債・賠償問題についてのジェノヴァ会議へのロシア政府の対応に関わる。レーニンは政府代表の外務人民委員チチャーリンに宛てた1922年2月10日付書簡で、「ジェノヴァ会議は決裂することが我々には都合がよい、もちろん我々の手によってではなく」と述べ、これについてリトヴィノフ、ヨッフエと対策を練るよう指示した。そして彼は、「このことはたとえ機密文書でも触れてはならない。この文書は私に戻すこと。焼却する」と付け加えた（強調は原文による）。これら二つの事例は、新たな史実を明らかにすると同時に、公式と非公式の態度を使い分

けるレーニンのリーダーシップの特徴をも示している。

第五は、反レーニン・キャンペーンの中心をなしていたテロルの問題である。苛酷な抑圧をレーニンが直接指示し、あるいは承認していたことを物語る多くの文書が公表された。発表当時、ロシア国内でセンセーションを呼んだ事例はすでに紹介したとおりであるが、他にも知識人に対する抑圧指示など、レーニンの細部にわたる関与を示す文書も多い。ここでは内戦時のユダヤ人虐殺に対する彼の対応について触れるに留める。

1920年10月から翌年夏にかけて、ウクライナとベロルシア（現ベラルーシ）の各地から、赤軍によるユダヤ人虐殺を告発する報告と援助の要請がレーニンのもとへ寄せられた（これまでの内戦史研究では、赤軍によるユダヤ人虐殺は取り上げられていない）。そうした報告と要請に対するレーニンの対応について、収録文書では、彼がそれらの余白に「アルヒーフへ」と決裁したことが示されている。今のところ、この問題への政府の対応を示す文書が発見されていない以上、「アルヒーフへ」という書き込みが黙殺を意味した可能性は高い。

第六の分野は、レーニンとボリシェヴィキ指導者の関係に関わる。このうちのいくつかはすでにトロツキー文書によって知られており、レーニン文書はそれらを裏書きする意味を持つ。しかし、なかには注目に値する事実を含む文書もある。その一つは、すでに

1922年7月、スターリンらがトロツキーの排除を画策していたこと、そしてこれをL・カーメネフから知らされたレーニンが「愚かの極み」と痛烈に非難したことである（1922年7月中旬、カーメネフ宛書簡）。

またレーニン文書には、具体的な局面でレーニンが個々の指導者に加えた人物評価を示すものがある。たとえば、トロツキーについて「情熱と軍事的経験に富む。機構に熱中しているが、政治は何も知らない」という評価（1921年3月13日）、カーメネフについて「哀れな、ひ弱な、臆病な、おどおどした男だ」という評価（1921年12月1日）などである。この時、トロツキーとカーメネフはいずれもレーニンの提案に反対する立場をとっていた。レーニンが誰であれ反対者に対してこうした侮蔑の評価を行うことは、すでに革命前からメンシェヴィキ指導者たちが述べていたことではあるが、彼の激しい気性を改めて示しており興味深い。

パイプスとローギノフの二つの文書集では、これまで秘匿されてきたショッキングな文書ばかりが収録されているため、レーニンの人格や政治手法の「暗部」が強く印象づけられる。しかし同時に、ローギノフ版には1922年11月20日にレーニンがモスクワ・ソヴェトで行った演説なども全文が収録されており、彼の最晩年の思索を跡づけるうえで重要な史料集となっている。社会主義崩壊の政治的余熱がある程度冷却した今、冷静な眼でレーニン像の再構成を試みる必要があると思われる。